『椿説弓張月』続編巻四

鎮西八郎
爲朝外傳　椿説弓張月續編　卷之四

東都　曲亭主人編次

第三十八回　一夜の夫婦永訖を守れ　鏡中の幻術骨肉を割

寧王女廉夫人そ。中城ゐ困籠られて。嬾き月日をあけ暮しゐる。
程ほど。隙もく駒の足掻速く。又五七年の春秋を過しつ。かりし後
そ。中婦君利勇ゐも。憚れとところみしとやゐひん。毒計を逞くして。
逼り苦しめんともせど。王女ハ元来。王位ゐ無きまさびたのゐくゐ
後ゆとくて只困雅ゐ一生涯をおくふんとのこ原ひゐふるうんゝ寔
ゐ才色の傳なれ。いへばさふ形り。孝心いと勝けまばうやふうびこ遍
寃枉ゐ罹つく。薄氷を踏よりも。危きを脱まうへり。こゝ併

椿山文庫
関大学
昭和図書館

毛國判が誠忠をて。浦進ふとよりあり。それ人嫌忌の中ゆとりを
あけば。親くふとふざりしよ。ある夜更闌て。潛門を誰と同かし
ふ毛國判なりとかうた。王女も夫人もいとうるしくおぼせ〜かべ。
ゆゑて呼び入れて〜對面ふ毛國判ハ出居のかとゆ詫さて。ちぐと
ん入れ〜ふゆ。席薦ゆ。も云下よ斷離て。煤びくる几帳ゆ中の剣
へ。やるめふんとゆ〜て。緋の袴を掛られり。拂ひもあへぬ紙窓と
ゆ家ゆはなれ蜘蛛の網よ。昨夜の雨れ降そぶて。玉簾ゆ
めれど。網代天井ハ雨漏の痕ゆ汚れて。月の暈とふりのめれり。
貴ゆ世子ゆて。ゆハ世ゆ捐られのふ痛
ゆよとゆふ涙先ぶらて。ゆうさんるもにぐりぬ。當下王女を。
真鶴〜て茶ゆ賜らせ。按司毛國判を小夜深〜ふれるハ事ありて

ゆと問ふ人ハ毛國判小膝をすゆ。さんひ盃を人めのいぶせ〜て。明白ふ
を〜ふりも仏ど。竊よ愚意をゆえあげやとく。驚〜ちる事ゆ
義ゆあふ。廉夫人も夕食のるべ。命婦真鶴ハ忠臣司馬公順德
の女児ゆて。夫人のるゆハ異母女第正〜く王女の外戚ふ心ざれ信
ゆなるハ。父ゆも母ゆも苟りいと。年来の給事。誰うよくこれふ及ん。
その忠その孝。嘆賞ふ小餘ゆ。ちれども。りその志を合て。外ゆ
助れりのなくば。よろ川便なくいべ。よりて某媒妁て。婚縁ゆ締しゆ
ゆふんとゆの翼とゆべた。壯佼を擇ゆふ。さればとて。この婚縁公
て。佞人忽地疑ひを發〜て。王女のゆんるゆよりふ。彼ハ夫ゆ
を妻と只一夜さの契ゆ結びて。百年の苦樂ゆ共ゆせんこと忠
烈女なふでいよ〜ちゆ。自のるふぬ妹と夫を。推辭ゆとふ增ゆ

松壽が子
今も琉球國に俳優ありと中山傳信録ふ

はゝ近曾郷より挙られし里之子ゐ。松壽と申すものあり。彼ハこの中城の属村なる。姑場の里人陶氏が一子なり。少てより文武の道ゐ志ゐ常ゐ首里ゐ交かゝて。物学を務ふ。年十五の秋浦添の山径ゐ。驟雨を避んとて。猟夫の家ゐ立寄りたかゝびも。ちうねさ女の毒蛇となりしを。只一刀ゐ滅して。その名三省ゐ少えゝり。父母を往年別まかりて。この両三年仕官ゐ他ゐ。忠勤を励て。今茲ハ九歳をや紀んとの原来。某ゞ武藝の弟子なるゆへて。豫て機密を説知らし。語ひ課てゆへハ彼間者となりて。利勇ゐよ阿諛ひ悪人だゝゞ計校霸ゐ告たゝしゐ形。かゝ憑して壮佼なれば。忠義の為ゐ締ぶ縁しを。いとゞ推辞ゐべて。松壽外ゐ有りて賊臣ゆ防ぐ。生捕る内ゐ有りて給事せず。中婦君ゐ王女伊母子を害せんと謀りゐるもこれ

ゆ避れゐ便あり。このゆいうゐゐんと信ゐに密語まうせば。寧王女そさゝなり。廉夫人ゐ訪びて。まの婚ハゝゝゐ妹なれども。母ゐ義江あり。ちうれゐ按司媒妁して。良縁を結ゝゐこそ。ちうよなれ妹ゐ僥倖なれ。生捕ハゝさもゝゝどやゝといひうけてえゝりまへば。生捕ハ顔うら赧め。いとゞえされゐ仕ゝん。人ゐ婦ハ世ゐあるものゝえゝこと推辞まうひを。夫人國摂。ゝるゝに説諭し。何事も王女のおんゐなれば。まゝて兼ゝのへと。叮嚀ゐすゝえて領落さし。さて毛國摂ハ退牛ゐ詰且首里ゐ到て松壽ゐ縁由ゆ伝えゝゝし。婚縁既ゝ整ひしかば。黄道吉日ゆえゝみ。潛ゆゐ松壽を中城なる世子殿ゐ誘ゝゝ。王女夫人ゐ見参さし。この夜生捕と婚姻ゆえり行し。酒ゆ酌壽を迹るゝゝど。夫婦ハ一睡の後とゞゐ結びあへどして。その曉ゐ

陶松壽
浦添山ヨリ
鬼蛇を
滅す

立てられ。遂に婚姻をもとり添ふ。彼天上の牽牛織女も。歳に一度のあつまりはあれど。これは一夜の添臥が。あふ瓦別のくじめ。面をあらそるよしなれど。陶松壽も真話も。猟こる忠義の為とおりくで。胡越のごとくに遠離つ。恩愛いと濃やかにして。逢ふ日忘れ隙なく。十年あまり瓦孤ふ。おのく絶えなりけり。案下某生再説中婦君を。曚雲が妖言に惑はされて。子瓦生むるものありやすれどて。じめ利勇と交通しなは飽どして。美少年瓦。鞍後宮に養ひつ。世の譏を省とで。その為体。孫燕三宮瓦乱ふあふ。ぱ光明千人の垢を掻ふ似ふ。かく情慾ハ恣ふすれど。よれ年の涙でふ堰くごとふ術なく。十あまり七年の春れ。梢ハかつく紅ど。姿の花ハ衰へく。秋やふる根ふられ竹の。よそぐさくとやさく。五十ふ近くなりにれど。絶ふ尋る音色。おのれ尚寧王をその性隨弱なるふいく。老ゆれば民の訴をゆくふ倦く。国政を曚雲利勇にうち任し。放蕩を山を事とすれふ。今茲ハいよ〳〵の衰瓦ぬ。ゆえて。久後の故。公のと形くやありけん。有一日中婦君ふ対ひく。つる夫婦過世あしく。て男児をもとつる。齢既ふ。六十ふあまりわれふ。もゆ〳〵世嗣瓦定めよと。三司官ホが諫をもうべなり。されば。とて別よ子もあふぱ王女を。洙を失ひくるを懲さんとふ。中城へ閉籠てより。鞍の年月を経くり。彼も三十あまりあやなふんずくん。今ハ免そべれ付ありし。往よ毛國界がもうせしよしも理あれば王女ふ位瓦侍んとおりのふこそ。まづ。ゆえ。ちふとされなれと。宜ふとそれど。中婦君眉瓦聾ぬ王女の世ふ出ふんハ。年来希ひ侍るかふ。いと喜しく。侍れらしさくも

ふかそ去歳の冬より身の重たをおぼえ侍りを典藥正なども全く懷胎ありと定めはべりて。つゐに産ぬ子のされてとありとかつぐ外もなひ侍ふねど當初曚雲國師つゐに祝祷しを王子誕生あるべしとさうしたとかく國師ふ同定め大臣ふも外えもしあへりしと実しかに回答しをば。王京ぬて次の日曚雲が招きよりて利勇ホを召集合て世嗣のあ外議をれふ豫て諜しありせしあれば中婦君潛と晌をれ侍ふ曚雲をあくその意外ふ侍ふ。席外すめてまうとかう殿下ふん仁慈必うして寧王女のあをおぼしを忘れど。舊のあくあ世子としまうんハ理ふ於くあうれべられど。國の乳ふハ甚あうし故いうあとなれば中婦君有外ふまして臨月既よ近づなあへり。曚雲手ふの祈念空しかふび胎内の胎子權者の後外

あてはしまうと故よ胎氣を生平ふかうあうびこうがりて人その懷胎しあふをあることふ此度誕生の御子ハ疑ふべくもあらぬ王子あく在とふ。あじが行を待しあうで只今世嗣を定めあうて後悔その詮なうふん欲加捕王女外立くあ世子としあふとうたハ天孫氏の正統そこの時ふ絶あひなん極ていひぐうたるあふあれど彼寧王女ハ殿下の胎子ふあうび実ハ毛國狸ゥ花生なうあ。廉夫人宮中へ召れざる以前より從弟どうなれば毛國狸と疎うび是彼逐ふ密通し懷胎ていく行もあく殿下よ召れて寵恩そく侍子を孝うと世ふ誇り縱天をば欺くそもこの曚雲を欺ゆやかはとべうを。あば毛國狸が面を犯して謀こうらく王女のあよ非外覆ひおのれが子なれいうあもして。この國をうばせんとん。その奸計一朝のあふ

あらねど殿下ハ一点暁なくて王女を世嗣としまゐらす君なき物の國神怒り先廟受まゐらずして災が降し珠を棄ひてこれを妨なむしなり。貧道そちやうりよく推もれとも明白ならねばよしなくて深くこゝろに秘されど。今日かゝる一言を惜こて告まゐらするかゝる大事が惧あらし。その節のきたらば。こゞろをあはしまへらしと実に毒ありて啓されバ中婦君もうち驚きたるおもちして利勇ホと面をあはしぬ。これ不思議なるかなきくものかな。寧王女を毛國鼎が花子ありてありけれとハ神ならぬ身にして誰かハしらん。廉夫人の賢がほなる毛國鼎が忠臣めかせれ千仞の海も測れども量がたきを世の中は人の心の底なりとて舌を振て咨嘆しつ。當下利勇ハ膝をすゝめて朦雲に對ひ國師の明察が疑なき哉とかくど王女母

子推薦られたまひて後も毛國鼎も世の議論を憚りてや中城殿へまゐらせん彼王女が世にあらんと討捜ものなれバ區々として十年あまりを經たりや二昔に近き月日が經ぬるに過ぎしハいかにぞやその逞しき奸智がありてなどて謀叛を企ざりけれとおぼつかなきをなりといひもあへず。朦雲儀然と形をあらため。これハ南風原乃親方をしふ利勇ともおぼえぬ。毛國鼎が謀反稍久しといへども。いまだ氣色に顕されぬハ。それと傍辺と。勅禮なるに憚りてなり。亦彼が不軌の宿望全く果しぬるぞといへども。廉夫人宮中が出されて後ハ毛國鼎日夜潜て淫楽に耽れをりて遂に懈りて。事が急にせぞ。君王既に老させ給へバ世を辞しまふが待るのなり。さられを住ふハ彼をめつて王女の傅とし。後亦王女と廉夫人を。國鼎に預まゐらせつ。これ

盗人ふ糧を齎がごとし。彼が世が憚りて中城殿へ来ふべとらふハ。人ふ疑ひとそなる成。実ふとおりのハ洗そうるふん。とあざ〻笑ひ説示せば利勇ハいよ〻呆れるおりちー。按司黄帽宦ふ至るまで驚き惑ひくらふ所をあらふべ。尚寧王ふ。繹の慈を父て呆るるひ半晌ぐらう。まとりて頻ふ加えつ。只管に嘆息し。廉夫人毛國鼎が隠慝ぐ〻國師のらのごとくなふべ。その罪五逆ふ當るるおて。王女が國鼎ぐ子なりとハ。何をりて證据とせん。罪の疑しきハ刑を加ふふはしきふびや。と宜へバ。曚雲蒼〻殿下慈悲の制度をりて。人が かるぐしく罪しのらぐ。願くハ一面の鏡を貸ふ。彼ホが姦淫の為をうつて。おん疑を散しちふん。とまうしたあぐ。王烏〻〻。魅て里之子ふ仰て。大きなる鏡をとりすふしこれを中城の方へさし向

く。殿の畫柱ふ掛さしまへべ。曚雲やを〻ふを起して鏡のはとりふ。ふのこよりつまるひから。貧道目今千里眼の法術をりて國鼎が隠慝を照らふしのぐ。足ハられ閻王宮裡ふあるとらふ睇玫瑰の鏡ふ。晴を定めて禹せしとまうし果く。鏡ふ對ひ加持するふ三遍。君臣一斉これをこうふ。且して鏡の面赫奕と鮮明なるふ明月乃日升れがごく。世子廢殿の後堂隈なくうつれ間毎くくもむしふがらふ荒まこれ。時ハ九月の上浣ふて南海珠ふ暖く。木芙蓉華たく容蕋恨繁といふ渡鳥枝ふ囀る声愛々し。梅花もじめて白ふふ。桂樹ふ雑れ鐵樹花も含て冬ふ咲まう。翅ハ緑く眉白たを麻石求子。と人の呼ぶふ多。石求讀。伊石求ふ莫讀史の諸多渡れ秋の庭麥種下るとへ求食てハ何処へ落る紙きるこの月の

景物なり。簷の松風筧の水の音なふばかり。麁館に訪ふ人け
なけれバ鳳蕉舍は毛團冉ハ主猶ふ酌が執らし。廉夫人と酒あり
遊び盃もあびしめぐりて。いたく醉ねとえられき。廉夫人を鈍
味線をとりて操将し。

「琉球らるあるよし。徂徠翁の聘使記よ つくろうとて琉球淡子のせくとう」

いと柳。こころくふ。あふあやて。のよてそろりの。かぜよてりよう。

「仏ヶ若のある あやむといふ」

と声いと妙に唄ひふけれバ。團冉を廉夫人の膝を枕よ假寝しつ。

「以下解しぶし一説まうられめあとの小ちこえうべ とえりあつくは夫人手あげるこうん欤」

その動静云為咫尺の中にゐるゆくみれバ。尚寧王を瞬もせどうち
觀つ。眠さる限りなく。忽地鼻息荒くありて。且呆き一旦怒りつれ
ふもあらで俯よ。高坐より滾落腰をうちて起も得ざりしが。利勇ホ
慌忙く扶起されて王ハなほ眼ひかるとつかよせ。流るて涎を拭ひて。

其の全圖
春曙弓張月續編巻之四
九

ゆうゆくに左右なく足ゝ久り。大息吻〻いくりくれハ。ゝれ暗愚也ゝ。賊婦逆臣よ忻ら且。三十年来寧王女を這奴ホが花生なりとちふぶ。位をさへ併んと思ひつることを悔〻けり。利勇ハいそぐ軍兵をわけて中城へ走向ひ廉夫人毛國牌ハいふもさふ好り。寧王女が首を刎ゝ。佶と云せよ。といたまたるゝ作れホ。智あるものハ曚雲が幻術ゝ。あふぬるが鏡ホうつして君が惑しまるかと疑ひるゞ。威稜よ怕れゝ。明白ハ論じもぞ。衆皆頓首してまうけう。毛國牌ハ一人と討んとて。黥の軍兵がさし向ふれんハ。路次の煩ひ多べし。只穏便の制度をりて。とれを召よし。綽の虚実をゝぶ同しめんとし。と諫しかハ王諾ひて。志ふ〻ば孰が遣して。毛國牌を召さんべきと。問ホ利勇がはうとかう。里之子陶松壽ハ。仏ざま武して。物よ熟る壯佼なり。彼毛國牌が武藝の弟子なれども。その不義を憎みてや。久しくこれが疎みて。常ホ小臣が家ホ来訪ヒ。又掟牌金査國吉ハ。國牌が妻。新垣が従弟なり。此ものの故ありて。ふゝく國牌が恨れよし。松壽潛ホ小臣ホ告ゝるゆあり。今この両人ホ。計畧を授て中城へ遣しめば。毛國牌疑ひてくるべし。と啓されば。尚寧王。ゝゝ。ハ松壽。査國吉に。密旋を侍よ。と仰ホ。利勇ハ聽て。件の女人を閑室ホ招きよして。仰の趣を伝へ。ちゝ。ゝゝ。毛國牌中城ヒ生ゝ。ゝゝ。ハ辺ホハるゆホ托て。途ゝ引入し。松壽ハ世子殿よ走ゆきて。王女廉夫人が刺殺し。首が引提て。ゝ。ホよ。又査國吉ハ直よ毛國牌が家ホ推よせて。這奴が妻新垣と。その子どもを搦捕べし。加勢の兵士ハ捷経ゝ。陸續ホ遣とぞ。一世の忠節ゝゝ付ホあり。ゝゝ〻ゝ立ゆへ。といそぐせど。松壽

査国吉一説ふも及ど領掌して。従者ハいと窘し。馬上ゐぐゝふ正門より走り出る。二騎轡を並べつ。只管ふ嘆息し。既ふ従者の後ゐてゝ来をえゝりて。松壽霸ゆうふ査国吉に呼びとゞめ。牌金牌金ハ査国吉ガ官名なり何とゝ宣ふ。君王久しく曚雲が幻術ふ惑されて。且中婦君淫ほして。佞人時を得ゝ。二綱既ふ乱れて。王女を戮し。忠臣を害せんとして。国の滅んるも且夕ふあり。吾侍官卑く。禄微ふしてこれを救ひ得ざる。却て利勇に役せられて。不狂人も走るふ似たり。豈嘆くべきもの歟。と密語べば査国吉答て。四辺とゝれと豫て志をあはし。曚雲利勇ふ佞媚ゝれ。かゝれるのあゝんとふ。ゝゝ毛按司国摩ふ告んが為なり。直ふ縁由に彼人ふ告ゝじく。諸ともふ世子殿ふ楯籠。対まを引ゝけ潔く。王女廉夫人のもん目前

査国吉ガ官名なり

ふく陣没をぐくゝふなりぬ。といと勇しく回答しかば。松壽ハメでくさもこそ。とうち点ぜつ。ゝじし従者に結あはし。ゝゝび馬の足掻を早め。中城を望ゝて去ぬ。

第三十九回

浦添山ふ国摩使者ふ逢ふ　中山府ふ利勇忠臣に殺さ

毛国摩ハいまゞ利勇ふ計較をゝゝび。君王ゝゝび王女を世子ふ。ゝんとて。曚雲利勇ふの執權を集合ゝつゝし。今朝ゝも密書に。りて。陶松壽が告ゝしゝ。ゝゝび。ゝ欲びて。賂て笑ゝして縁由を王女廉夫人ふ告進ゝせ。綽の虚実をゝゝん為ふ従者両三人に移て首里へとてゝゝりふけるが。ゝゝび。首里と中城との間なる浦添山の麓ふて両人の使者ふ逢ひぬ。當下松壽査国吉ゝ。ゝるふ

毛國將が來りたれをうく。声をあり立毛按司。吾倘ちん使と素り
つ。君王の仰あり。と呼びて。國將忙しく馬より飛下て道次ふ丸て拜
ふどに。両使ハほとり近く騎つけて。鞍坪小威儀うい繕ひ。君王の仰
あり。此度王女廉夫人ゞ召えし。舊のごとく。王女を世子として。住と仰へ
まうんとなり。これ御ようて。大臣諸按司を召集合て。事を議したまふ
とぞ。とく〳〵參りまへと。相述ゞ。毛國將謹ごうけまろう。吾ごう
ハまふざりしが。只今首里へ參わるふ。こにてちん使ゝ行あひぬるこそ
幸なれ。誘まへとふ。その氣色滿面ゝ笑と含く。化念ゆ〳〵しく
かゞ。松壽査國吉ハ。と苦しくて。利勇が計策と。ちゝせまゝ
そもひながゞ。從者ゝ少まんるゝと憚く。明白ゝ御えいろゞ。いゝ吾倘
ハ。是ゝり直ゝ。中城殿へまりて。王女廉夫人ゝ。侍近ゝ。され仰あれ

ハ。りうもあハゆりごとといふ。國判さく。ちうぶハ詩しゐく。と回答て。
馬ふ内りとうら蹄り。東西ふ別且つ。間五六町ゆた隔りし比松雪
査國吉りうもに。鞭を鳴らして追蒐るつ。毛按司。ちゞし帰こ
りくゑほいふべたるゆあり。さぼびうれハ。國判雪氏引戻して舊地よ
馳書をるふ。是彼の従者ハ既ふ遠ふ後且てう。この隙ゑ両人の
壮佼ハ。曚雲ゞ鏡中の幻術中婦君利勇ゞ計校おらもゐく國判
ふさ〳〵ゆさ。又いふゆう。綽既ふかくの如くるたふ。按司。首里ふ到て
るつて。忽地首を喪ふべし。たゆ〳〵引くして。世子殿ふ稽ゞ彩り。忠
義の士を招て集めて。曚雲利勇とうら滅し。王女を世ゑ立ゆく
し。吾俑外ふありて。反間の計を行ゞ。逆賊を滅さんる。踵氏
めゞ〳〵そべうふび。猶豫ちゆふゆ。といと信ゆうふいそゞせぞ。毛

國判ゆ〳〵ら掉。乃辺ふ。従者ゆ伊良じて。好〳〵びうれと呼び戻
火急の危難を告ゆふゆ。ゆほ日月他ふ墜ゞ。國神も人のはこゝ氏。
憐ゆふゆとおぼし。ちうハあれ。罪なくはしゝ氏。いひとうんゐゆもせよ。
世子殿ふ稽籠。討ゆ。けて。防ゞ戦ゞ。王女ハ子として父と挑こ
うれハ臣として君氏凌ぐなり。されとたハ。罪なくをいひとかんとゝ。却
叛逆の罪人となりなん。常言ふ。忠臣の犬とゐるとも。乱離の人とゐなり
そといへ。ゆふ足ゝぶ死をべた日形り。清辺ゝら。いよ〳〵忠義の志ゞ移
さゝゝ。潛ふ王女廉夫人を落し進らせ。し暇ゆ〳〵ばゞ。ゞ妻子ふゆ。綽
の趣を告ちゝして。禍を避さしゆく。家子鶴ハ。十四歳。次男亀ハ。十二歳
なれば西東をもとやちゝゞし。父ゞ孤忠の苦しををひゆう。寧王女乃
おんゐゆふ。同胞命氏捨よゝと。仕人まひねゞ回答して。ゆる氣色を

なりけり。洁処ゐ後者ホ。東西より喘く走り来る。間近くなりしうべ。松壽査國吉ハ。ゆくゑ諫ゑ。ゆくゑ沼ゑ毛國摂を。遂ゐ馬の平首を東へ引むけ。首里ゑ投て。池去ゑ。査國吉つくづくと目送りて。陶松壽ゐいふ。毛按司ハ。寔ゐ蓋世の忠臣ぞ。これ彼人乃通家ゑ。年来の恩義いと重し。命ゑ捨くその子ども。鶴亀ホゑ救つるぞ。傍辺ハくゐく中城殿へふりて。王女と廉夫人を落し。近ふせ便宜の地ゐ潜せなれし。と密語バ。松壽微笑ゐ。傍辺ゐ干ハ去うべし。これハ血氣の勇ゐ。とりて。かるがしく命ゑ隕んとハ。ろろど。救ふべくを救ひ進ふせ。救ひ。ぎくゐさて已なん。薪を抱て火を救ひ。湯とりて沸ゑ。面るとも。労すれのこゐて切ゐ。ゐんや。狼狽なれ。後まくも。胡慮なくべしといふゑ。査國吉ゆゑ。もゐと大ふ怒り。汝ハたや命をしくて。言ゑ両端ゐ。書ゐるとゐ。かくハ王女のうへも。又ゑ分とゐ。されバ。ゐくく。つぐ。ゑむゐて。彼を助。これを救ふゐ難義ゐり。所詮汝く此処ゐて。うち果さんゐ。といきまいて。かけも。おそべき氣ゑ。松壽ハ此ニも騒ぎして。莞尓とし。牌金ゐどて。かくハ思慮ゐ。汚辺を勇をりて恩ゐ。答へんとゐ。これハ智とりて忠を竭とゐのなり。とし。機ゐ臨ゐ変ゐ。ゐ。とハ曚雲利勇ゑ。欺課て。王女を救ひ。かぐし。機密ばゐ。ゐ。議ゐ。べ。ゐ。ふ。ば。辺ゐ。とゐれと。無果て。何の益ありやと。説諭バ。査國吉怒地ゐ。面を和ふげ。ゐ。ゐ。ゐ。と。應ゐ。間ゐ。後者ホ走ゐ。ゐれバ。迭ゐ。道をいそぐして。美里と浦添の間ゐ。捷径ゐ。馬をとゐめつ。飛ぶ似ゐ走ふ。ゐれバ。後者ホハ又後ゐ。ゐ。不遑。按司毛國摂ゐ。重ゑ忠義ゐ。駐ゐ。命も。絶ゐ。脱ゐ。時運ゐ。ゐ。べ

言ゑ両端ゐ書ゐ。とゐ。かくハ王女のうへも。又ゑ分とゐ。されバ。ゐ。ゐ。つぐ。ゑむゐて。彼を助。これを救ふゐ難義ゐり。所詮汝く此処ゐて。うち果さんゐ。といきまいて。かけも。おそべき氣ゑ。松壽ハ此ニも騒ぎして。莞尓とし。牌金ゐどて。かくハ思慮ゐ。汚辺を勇をりて恩ゐ。答へんとゐ。これハ智とりて忠を竭とゐのなり。とし。機ゐ臨ゐ変ゐ。ゐ。とハ曚雲利勇ゑ。欺課て。王女を救ひ。かぐし。機密ばゐ。ゐ。議ゐ。べ。ゐ。ふ。ば。辺ゐ。とゐれと。無果て。何の益ありやと。説諭バ。査國吉怒地ゐ。面を和ふげ。ゐ。ゐ。ゐ。と。應ゐ。間ゐ。後者ホ走ゐ。ゐれバ。迭ゐ。道をいそぐして。美里と浦添の間ゐ。捷径ゐ。馬をとゐめつ。飛ぶ似ゐ走ふ。ゐれバ。後者ホハ又後ゐ。ゐ。不遑。按司毛國摂ゐ。重ゑ忠義ゐ。駐ゐ。命も。絶ゐ。脱ゐ。時運ゐ。ゐ。べ

毛國博
忠信
宮中ふ
寛死と

逆臣國摩が隱謀悉く顯はして既に誅伏せらるゝね。王女廉夫人。
生い給ふが討まゐ陶松壽うけまゐらす。國摩が妻と子どもらをば。
査國吉ふ仰て搦捕らしめ給へば。聖慮ゆうゆうこゝに安じおのゝ
祝しまゐりゆへと。ほじろみて。おとゝにとし示せば。三司百官駭然と
驚き怕ぢ。逆賊立地に滅て。邦家まゐ〳〵泰平なるゝ。公私れ幸
これ〳〵まゐるゆとぞ。洪ひね當下尚寧王ハ曚雲ふ對ひ。國師。嚮
ふ中婦君ハ既ふ有孕ゝとらひれいつの程ふ分娩るべき。審ふ指示
ゆへと仰ぢば。曚雲ちびうち紫じつ。指を屈てまうひゆゆ中婦君の
ゐ産。ゑくハこの月の中ふあり。よしや遲くとも四五十日ハこべゝふ誕
生の皇子。王子ふてまゐ陛をなれば。年ゆのおん年足りて。ことそ欲
びあばそゝふと啓れば。王斜ゆふび欣悅。ゝうふび今より母子平

安の加持あゝぐとて。叮嚀ふ宜つとれば。曚雲又まうひゆゆ平産の
おん祈ハ仰を行ぢて年ふこれを修行せり。只忽ふ走ぐこれそ。王女
廉夫人の討まなり。陶松壽ハかひゝぐ〳〵壯佼なりとゆへども彼のこ
ふうら任〳〵まうんハ。なほ公りとぢ。ゆゆ利勇ふ駿の氣登之ゆさし
副ら是。松壽を助けゝ王女を討〳〵めゆ人ぢ。とまうひふそ尚寧王
げふゝと点改ゝ。そのぢ存と仰ぢび利勇欣然として命を稟家ぢ
も立ゝ〳〵び。歡會門のほうふて鎧ゝうゝ〳〵と投被馬上ふて腹
帶結びて驀地ふ走り出ぢば。早雄の氣登之ふ紫中官ふ後ぢ〳〵て。
おの〳〵械器ゆ引提つ。喘〳〵ぞ追ひ續ね。

第四十回

涙を沃ゝ松壽廉夫人ゆ擊
神ゆ顯て白縫寧王女を祐

里之子陶松寿。掟牌金査国吉ハ浦添山の麓にて毛国鼎を目送つ。
駿馬に白泡をはして。中城へ馳ゆく程に。従者ハ遥に後れ。加勢の兵
士もいまだ到らず。この隙に落さべしと。査国吉ハ毛国鼎が家へと
そ引されて。松寿ハ世子殿へまゐりて。後門のこなたにて馬より飛下つと
門内に潜て入りて。訪問もせず。園の木立を遶りつゝ。奥ふかく参り行
に。寧王女廉夫人ハ。桂華殿の孫廂に桂の花をうち瞻ておハせしが。
縷のみ伴ひと蕭々にて。生鶴只一人侍りつ。忽地に外面か声く。
こハいかに松寿がまゐりてはと啓されけれ。向に松寿ハせまづて欄の下に拝
伏し。言語ハなくて。唯に落涙ありける。廉夫人驚して汝ハあふ
んとおぼせしかバ。近く喚びのぼして宣ふやう。めづらかなり陶松寿汝
生鶴と婚姻せし夜。只一たびまみえつるのみにて。数の年を過しければ。

王女もまだ身も面忘れしに。年頃恋しとぞ。良人なればこそ。生鶴
ハもや足音にても志りつらめ。さても連忙しく参れるや。いとくところ
のとなし。都ハいかなる分野にや。君王ハいよゝ安寧に。在さむと問ひ
給へば。松寿むせかへりて。逆賊臣宮中に充満て。世ハそや季になり
てゆ。はじめよりまうせバ。此ごとくなり。抑ハ箇様なりしと曚雲が鏡
中に奇怪の影をうつして。王女ハ夫人と毛国鼎が子なりといひしこと
松寿と査国吉に仰せて。国鼎を召さしめしこれと浦添山の麓にて
て行あひ。利勇ホが計較を告て。直に引かへしゆく。と諫しかど。国鼎ハ
死を決して首里へまゐりしに。一五一十伝へあげ。査国吉ハ毛国鼎
が妻と子どもを救んとて。その家へまゐりつ。利勇ハさらに妖術を逞
されし曚雲も。吾侪を毛按司の間者とハおもひ。直に中城殿へ走せ

ゆゑ〳〵。王女と夫人のおん首、拝まなれ。捷径より加勢の兵士を遣ぜし。といふ。人ふ[illegible]れぬ間よ。便宜の地へおん供はくまうなん。誘ふ人。といそがしまうせば。廉夫人ハ王女生の語と面をあはせ。こゝを白いふ。とぞうに。呆れ[illegible]ぬ。[illegible]ハ意もえせぞ。ふり落る涙を拭ひ。あゝ。いうなれば。つゞ身世ふ。あるかひもなく。天神地祇ふ捨ふ立て。忍もうけぬ濡衣ハ。胸あひぐるに中婦君の。姑こ角組ム雅芦の。面といハるる濁江のふ[illegible]伎倆と曉まゝ。王女ハ[illegible]子よあはじとて。殺せと仰る父王の口誕こそ意を切ねとてもかくても脱ぎ[illegible]て。命なりせばつゞ身ハ[illegible]刃に呼ゝ紅木の赤[illegible]を[illegible]せ付ふん。松壽丸語いうゆもして。王女を助け進ふせよとて。声を惜ず泣ふ理なれど理ともいひうゝ夫婦さまゝに慰めまうせば。寧王女も双眼よ涙を

含こと。母のこいうて殺さべと。罪なをいひとうとて。脱ぎも果ねゐを躱さべ。不孝のうへの不孝なり。毛圃得ゝ死を極めて。首里へふ[illegible]ぬ志られもかゝることあるべ[illegible]れ。恨ハあゝじ。歎きまゝふる。とう刃も[illegible]え期して。ゆゝ。といひ励して。[illegible]ふ驕さまふふ氣ふ入ゐれば。松壽丸[illegible]ふ晒して。声をあり立。怜悧ハおいしませども。さて。うハ婦女子の見識なり。死をる代孝とおゞとあや賊臣を滅して。民を救ふハ王者の孝心。再て討手の大勢を向ふ立ゐハいうはして脱ぎまうん。いひがひるし。と諫つ驕つ。夫婦うひゞし扶掖て。後門より落ー[illegible]せん。と淺ふれふ。この女ハ形容あてハ便ゐし。せんかくせんとて。松壽且〳〵尋思しつ。究竟のゐこそあれ。ふハ姑場嶽ゐる山神[illegible]ふて姑場。塾田當間。伊集嶋袋の里人ホ。さまゝの打扮して。御

所近くねうまつる。鬱ゐくゐれるとれゐこんてう。これハ箇様ここは
て。廉夫人のおん供せん。芸藩ハ如此くしに打扮て。寧王女のお供せよ。
ちゝゝといそぐして。大床ゐ拵られ。花藍をとりおうして廉夫人
ゐ負しこべ。芸藩ハ殿内なる。先王廟の木獅子とうち被ぐく。
王女を後方ゐ隠し入る。主従四人。ゐ祀のねうり物ゐ打扮て巷口を
投て狂ひ出づ。抑琉球国ゐ種くの舞曲俳優あり。太平調。長生
苑芷蘭香。天孫太平歌。この天孫氏の桃花源。楊香。壽尊翁ホの雅
楽ハ王宮ゐ〻ぐでハ奥い行とれるゆを許さん。その餘ゐ立弄あり。花索弄
あり。又狛弄武弄。毬弄。捍弄あり。花索弄ハ小童三人ゐ造花
をいゝぐて錦の半臂を被て花藍を肩ゐかけて弄し。廉夫人とる
うちこれを打扮ね。又毬弄ハ。小童二人五ちの毬を被ぐく。金の毬の四方
ゐ玲を著。朱と紋のしと長きゆうて左右に立て弄ぶ。二ちの木
獅子と狂して。種くの曲ゆうゐ甚奥つあり。王女出て。この弄童ゐ打
扮ね。又竿弄あり。是田楽の類ホや。又扇曲学節曲あり。これハ男
弄白拍子の類なるべし。以上間切毎の城隍祭ゐハかゝるべ奥い行とれと
なん。間話休題。廉夫人ハ。王女出て立ゐ。陶松壽ゐ扶被ぐく。姑
場のうとへ歩ゐ折く。野嵩のめとう。軍兵二三百馳ゐ。馬煙と蹴
立さし。鬨ゆ吶と揚ゐ。松壽ハこれを見て。大ゐ驚て討る
の大軍とや近つれぬいそぐして。まうしもあくねよ。又姑場の山間
より。野臥ホ発起ね。とおばく。貝螺の音東然。さてハ四方ゐ
敵をうけつ。こハいうんせん。と嘆諸て。ゆくもえ四方べゆゐふもかへて
うと羽の夜の踏子ゆゆゐ牙ハ殊さふん。廉夫人もこの景迹ゐ今ゐ

古巴揚断ハ樹の名也。傳信録に樹の高さ三丈許。葉ハ柿の如し。八九月に實のる。音果の如し。閩中にもこれあり。戊土と名くといへり

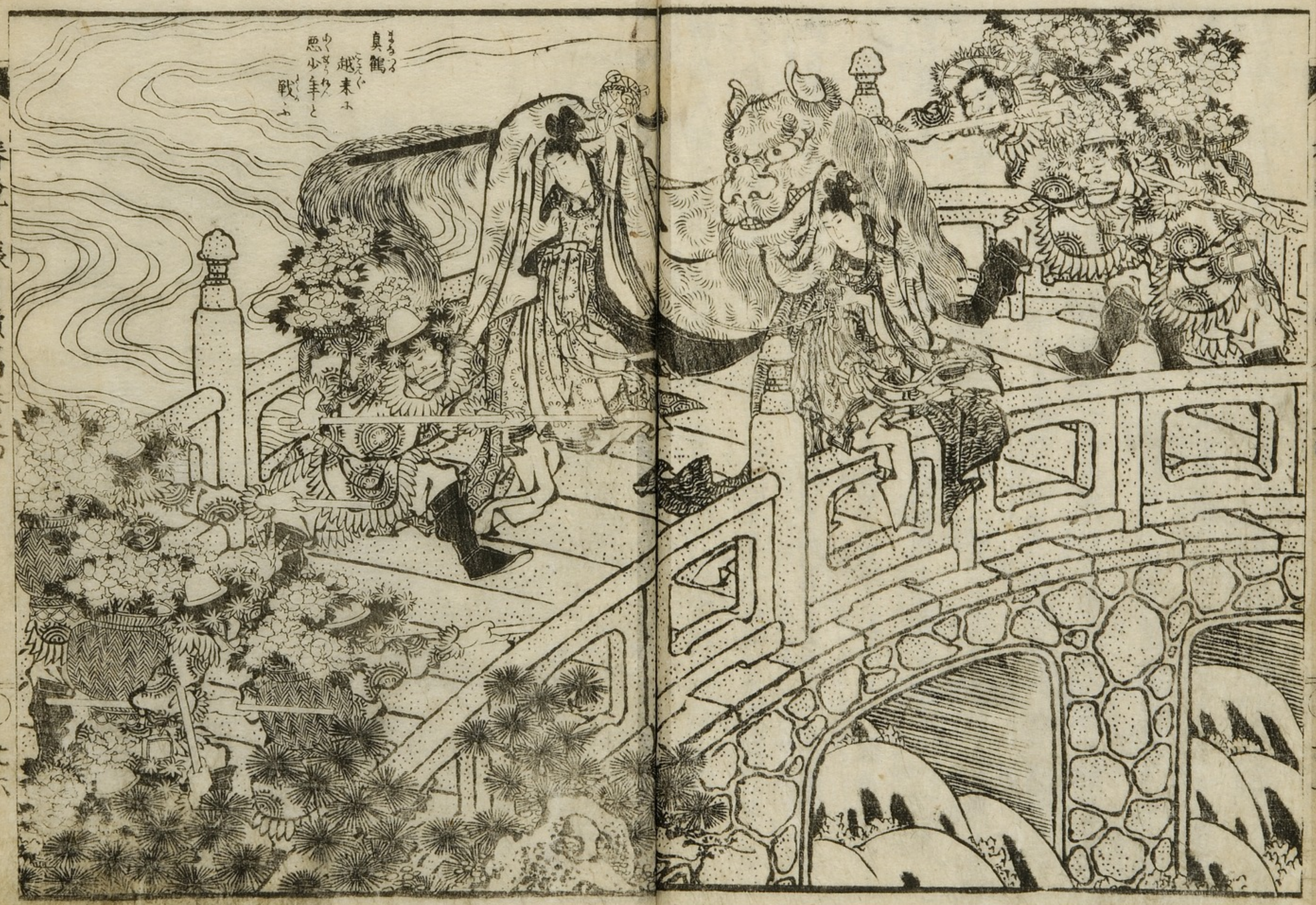
かゝる處に。古巴揚断戊土の樹蔭に坐せし松壽。討手の軍兵彼此に充満られバ。寧王女のうへいと心もとなし。海て首を刎て討手の大将軍にみせよかし。志からば一方の囲をひらけて。王女ハ虎口を脱れもやらん。今さら躊躇と雖ども。雪をかして項をさし伸。うち合して一刀に切とどかうねぞかりや花藍の。花よりもろき余命ある。松壽時ハ阿呀と愈ても。かゝる輕もなかるとも。夢ともわかぬ世の中に孝女節婦を守るのみ。君臭物ハ在ね。我命を限りに防ぎ戦ひ。敵に首をわたさじと思ふものゝ。それから夫人を撃るに。切名かくしてありんや。さるほどに寧王女も。とかくしておはしけんとやせまじかくやせましと心一ツに定かねて。腸絞る油樹の梢瞻て忙然たり。簾夫人をみつけて。あるめし何とてかくハ憶れてみにもおはする

かせ。王女をさへ撃せるが。忠とやいはん義とやいはん。緯後れても悔ともかひなし。といそがれども近く討手の軍兵脱しハ得せず。綱の魚主を喪ふ犬自物と身を失し果るも忠義なるべし何厭ふべき。とおもひかへして。剱を閃と抜翳せど四十の外人を六の花氷室の櫻老樹とハなるさへあやにけらしかし。かく人よりもふかき人か。胸苦しさハいやましつ。祭祀の弁子にまじらひて後門より出でにしと。今生の別とハ王女もしらずして後の歎きはいふばかり。会稽に物るおりにしそ。さくらさへいくそさび励されていとゞなほ。灑り脱定めなく。刃を撲地と落し。尻居に撲と衝き胸をひゝと陣鉦を音にのみきけど目にハ見ね。敵にあふ見じと。簾夫人へ。[illegible]剱を取て刀尖まとふ袂百合。うちふれるかに襟上へつらねて

姫場の
山里お
鼠夫人刃ヲ
伏セ

外なんは松壽はうく。おん首級とおりて。袿の袖を引断離て。涙とともに押包て。駿く樹蔭を走り出。討手の死ぶりてゆくを。利勇は床几ふ尻をうけ。敷の筑登之代左右よ立。望び入且つく。對面を。當下松壽は。雄を。ふ廉夫人の首級を抱き。恭く跪き。某儻ヨロハ一騎。世子殿ふ馳向ひて。矢庭ふ廉夫人代刺殺し。おん首級をおりて立あがるその隙よ。寧王女は。命婦真鶴を招く。後門より脱去る。さるほどに。彼此を索遶る折ふ。南風原の親方。利勇討手の大將として。ずらふ馳向ひ。まのはしゆ。兵ども。緯の為体を注進し。廉夫人のおん首級を実検ふ入るべきやとて。まわり。おりふふ王女は。とゆ遠く落延ひたん。一方の囲かとりて。その兵士と。某ふ頑まりて。忽地ふ追留ひべしと。信らて。夫人の首級をさし出せば。利勇は琉登之して受とり。祇の如く実検て。これを首里へおくりのぶし。さて松壽ふ對くいふ。既ふ廉夫人代討とりとらんぬ。いまぞ王女の首とえがれがうぐくこの囲とりたぶし。王女は嚮ふ。祭祀の行り扮ふ打扮。靠童ふ。ふうら雜りて間切を出る。と告るのあるふ。ふりて。このほうなる悪少年ふ。謀を授りふ。その往方代穿鑿を。それは且くこの処ふ死して。查風吉が青耗を待ん。沙はいよく油断ふ。王女と追蒐て討留よと。独る隈なく指揮する。ふぞ。松壽は女ぶて辞別を。又姑場を投て走去るかくしほどふ。寧王女は。ふう弱ふ扶掖を。毬弄ふ打扮て。主従木獅子代うち被て。里の猛角ふまぎらひつ。姑場嶽の北のうと。鐵来を投て。蔵ふ。法処ふ中城なる悪少年ふ。錦の半臂ふ。光を立して。むくこ推取巻。獅子ふよしある。花の王。その國王の子と偽る。寧王女代捕捕を。

賞銭ハ元ホ任とてべし。と紫巾官の仰をうけ。迹の祭みるくゝね間よと俄須ヨ脚ろ〳〵花索踊花の兄〳〵らまろ魁て。捍棒ニ元せんヨ其ハ獅子貸せと異口同音ホ呼びうけて。金箔ちる捍棒を振廻して打てかゝるべ。さハ落ハ。寧王女ハ後方ホ囲ひ。丁と受てハいやれ〳〵ホ。獅子ヨ牡丹の落花狼藉。故ニを打て谷落し。獅子の子もし洞返し。左右へ撲地と投除れば。こハ打をしと。競ひうつく。八方より打ホ。獅子の真額打裂ると。半面あふをさの路ハ布掻捨て荒尓し。ニ元せ紙ど被踊被〳〵れて〳〵ぶ止んや。その風ホ處〳〵ぶ〳〵も王女ハ猶ものらん。獅子身中の蛆虫ども。劔の素れ〳〵ヨ一奏元せん。可惜命ヨ失ひそ。あぶと笑て立〳〵れ。女とおりひ侮りし恶少年ホ大ホ怒り。さてもほぶれヨ用ざいて。あれ打倒せと散動〳〵。又闘を捍棒ハ。劔を抜て切拂ひ。右ホ當り左ヨ拄縦横ニ碍ホ拂を戦ひ。三人ホまと負し。二人を矢庭ヨ砍伏〳〵。ちれども生路ハ。その身鉄石ホあらざれハ。肩を打し腕を折ヨ。終ホ手ヨ勢ホ當てかゝ。株ホ跌を。磯と輾べハ。衆皆得〳〵と。棒とり直し。乱打ヨ打程ホ憐むべし。真鶴ハ。肉破ヨ骨碎け。今宵ぞ死生の山蔭を。越来処の名もの露と消ようけ。寧王女ハこの形勢ホ。必死と極めて走るも迯ど。生路ハ死と憐こて。涙ホ涙ヨしぶきまふハ。一人つと跳かゝ。髪を爬〳〵ら倒せば。又一人の恶少年。緯切てもる海放さぶ。生路ハ劔掻取て。王女の胸前へ閃し。吐嗟目今舞れるひね。こえ〳〵る折ら。一團の燐火空中ヨ飛まつて。王女の懐へ入ると。斉しく。王女ハ岸破と身を起し。忽地劔を奪ひとつて。二人ハ首ハ打落し。佶とホ


真鶴越来ふ悪少年と戦ふ

王女を祐く
白狼の
怨魂
悪少年ホを
懲ふそ
きらぬひ
いそさだ
さる眞大ら

まへて立るふその形容じめみ似ぞ。柳眉を蹴立て星眼尖く。百万騎の大軍をもおそれつゞたまをなれば。殘るものども大きふ駭さこゝ不審。王女あハ物の憑とく狂ひとるとおぼゆるぞ。そも汝ハ鬼か。狐か。名告れ〳〵。同せも果ぞ。王女ハ刃の血を押拭ひつゝ。これを左手ふとり出し。南海孤嶋の賊民ホ。告ち〳〵すれ名あハあ〳〵ねど。生ずるものもあ〳〵。耳底よりぞ。あもて後の世れ口碑ホ傳よ。これハ是大日本清和天皇九代の後裔。六條判官為義の八男鎮西八郎源為朝ねーの嫡室肥後國人阿蘇四郎平忠國が女兒なりけれ。白縫姫が亡魂なり。これ近曾夫とともホ渡海の舟中。風濤の難ふ逢つて。身を海底ホ投とりしとも。其魂ハこの琉球ヨ漂泊しく。こゝに夫を俟ること久し。ちゝ寧王女ハ。むかしこゝ良人八郎ねーぞ。

一朝値遇の縁あれハ。且くこの身體を借りて。良人と子どもヨ相いひうれし。その創業を補んとて。かれば王女ホーて王女ホあ〳〵ぞ。白縫ヨして白縫ホ孝女と節婦と合體して。ある時ハ王女ようり。又あれとなれハ白縫ようん。今生活ぶるヨ仇を報ぶぞハ誰ようこれを實とせん。其処る退そとといてすきつ。死るの如く死うて。前ヨ立ようれ二三人が。晩向腸嬢ひなく。だゝ〳〵ずんど砍めんハ。悪少年ホ。まんく怕れて。逃んとすれどうしろ神ホ。ひきく返されて輾轉。起んとすれ仆て砍る。或ハ隻手打落され。或ハ膝を薙仆されまく命助れるのも。深疾負ねハようけれ。このように日もとも暮れて。身死駅をみ便あれハ。王女ハ少年ホが死を取て。ホ戴て。桿棒を突立て。祭祀の舞童が。ようり後れて。ゆるがごとく。いとうひ〳〵しく

こゝらへに。女ゐ稀なれ白縫の。亡魂ゐ導き恩納嶽ゐまけ入り
ぬふ山ハ越来の北ゑあり。時方ふ大日本。人皇八十代の天子。高倉院
の御代あろしめし。安元二年丙申秋九月二日也。

椿說弓張月續編卷之四畢

倫冊

極乙五屋